



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

「またあなたとともに」

▲ラテン語規範版は

「またあなたの霊とともに」

「主は皆さんとともに」という司式者の呼びかけに対し、これまで会衆は「また司祭とともに」と応じていましたが、新式次第では「またあなたとともに」に変更されます。この箇所はラテン語規範版の直訳が「またあなたの霊とともに」であることに留意しておきましょう。

「霊とは何ですか？」という問いに対して明瞭な定義を与えることなどできません。霊という言葉は、何かを説明する

ためにつくられたというよりも、むしろ体験が口から溢れ出て言葉になったようなものだと思うのです（ヘブライ語で霊は「ルーアツハ」で、まさに、思わずため息か何か口から溢れ出てきたかのような音声です）。それは肉体に対する靈魂のことを指す概念などという単純なものではなくて、神との深く豊かな交わりに招かれ、絶えざる神との繋がりを生きている私たちの、命の無限の領域を射程におさめた言葉です。しかし、だからといって、曖昧模糊としたまやかしの言葉

などでは決してありません。それどころか、具体的な現実を生きていく私たちは、命の深い意味を見出すときに、「これだ！」という確かな手応えを抱き、こうして、誰もが自分が「霊」であることを否応なく知るのである。もちろんそれは、人間的な充実感や幸福感などと同じではありません。あえて聖句を当てるとすれば、「愛するものは神を知る」（1ヨハネ4・7）という言葉がいいかもしれませぬ。「神は霊である」（ヨハネ4・24）という単刀直入な言葉も貴重です。神との語らいのうちに生きている私たちは、もうすでに霊的に生きていることを教えてくれるからです。そして「風は思いのままに吹く」（ヨハネ3・8）というイエ

スの言葉は、霊が私の思い通りにはならないことを語りつつ、霊に従って生きる者の深い安らぎと自由を歌っているのです（※1）。

新しい式次第が「またあなたの霊とともに」というラテン語規範版の直訳を避けた理由については、「あなたの霊」では身体を離れた靈魂を連想させるなど意味がつかみにくいため、諸外国や他教派の式文も参考にして、これを聖書的語法に基づく全人的な表現と受け止め、「あなた」とする訳が採用されました（※2）とされています。これからはミサで「またあなたとともに」と口にする私たちが、この「あなた」は、無限の深みと広がりを持ち、神との永遠の交わりのうちに、今を具体的に生きている人間存在への畏敬と、その人間を愛して支える神への果てしない感謝がこめられた、「あなた」になるのではないのでしょうか。

※1 ギリシア語では「風」も「霊」も「プネウマ」という同じ言葉

※2 カトリック中央協議会『新しい「ミサの式次第と第一」第四奉献文』の「変更箇所」16頁（傍点は筆者）